静私幼だより

ニモが一匹・二匹・三匹…

- 夏の研修報告
- 特集「乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達(その6)」 遠藤 利彦
- 特集「可能性を引き出すリーダーシップ(その1)」 松原 美里
- コミュニティ(保育の窓)
- もの想い(藤枝東幼稚園／あけぼの幼稚園)
- 乳幼児期の体力づくりの考え方 磯谷 仁
- ナイスショット&編集後記

こどもが まんなか PROJECT
只今全国展開中

NO.196
2022⑫
Winter

夏の研修報告

今年の夏の研修は例年通り数多くの研修が開催され、対面とリモートの両方を取り入れながらおこなわれました。それぞれの研修の参加者たちの感想なども含め研修報告をいたします。

初任者研修会（第４回）

〈7月25日㈪、リモート研修〉

【講義１】静岡福祉大学准教授 二木秀幸先生「表現遊びと楽しもう」

「表現とは何か」ということを考え、“表現する”ということの楽しさを学びました。実際に歌を歌うなどし、自分の内面にある思いや気持ちを“おもて”に“あらわす”という保育現場でも生かせる表現遊びを学ぶことができました。日常的に子どもと一緒に行い、表現あそびの楽しさを伝えられたらと思いました。

【講義２】常葉大学准教授 増田泉先生「保護者への話し方－敬語のマナーと使い方」

日常でもよくある保護者の方と会話する際の注意点を再確認することができました。正しい敬語の使い方や、話す際に気をつけるべき点、適切な話し方などを学びました。今後の保育にも取り入れ、保護者とも良い関係を築き、家庭と連携しながら子どもを育てるという自覚を持ち、日々の保育を行っていきたいと思います。

２年目教員研修会

〈7月26日㈫、グランシップ〉

【講義１】静岡県立大学短期大学部教授 永倉みゆき先生「あなたの保育の原点は？－自分の保育観を見つめてみましょう－」

「自分の保育観」を見つめ直し、自分のやりたいこと・クラスの子どもたちと共につくりあげていきたいことを、もう一度自分と向き合って考えました。その中で、こうなって欲しいという「保育者の願い」が「子どもの義務」になっていないかを考えることが大切だと感じました。

【講義２】東京家政大学教授 細田淳子先生「幼児が自発的・創造的に楽しむ音楽表現」

「紙コップで７つ以上の音を鳴らしてみようー！」と言って始まった細田先生の講義では、実際に音楽あそびをしたり、合奏の基本的な方法を教えていただいたりしました。１つの音を聞いた時の感じ方・表現の仕方は無限にあるのだと改めて感じました。完成度の高い合奏を作る中にも、常に楽しさを忘れないようにしていきたいと思います。

ミドルリーダー研修

〈7月27日㈬、8月1日㈪、2日㈫、グランシップ〉

【講義１】鈴木まり子ファシリテーター事務所代表 鈴木まり子先生「園内研修を推進するための～ファシリテーションを学ぶ～」

ファシリテーションという言葉は、今回の研修会で初めて聞きました。園内研修は、職員全体で参加するという意識を持ち、さらには自分事にしていくことで当事者意識が高まり、より良い研修となることを学びました。話し合いに向けての様々なコツも教えていただいたので、ファシリテーターとなり、実践してみたいです。

【講義２・３】高知学園大学・高知学園短期大学教授 山下文一先生「これからの教育の方向性と求められるミドルリーダーの役割」「カリキュラムマネジメントの意義とミドルリーダーの役割」

私たち保育者は、これからの社会を想像し、子どもたちが大人になって生きていくために必要な力を、基礎である幼稚園時代に伝えていく必要がある。そのためには、保育者同士が共に同じ方向を向き、園目標に向かい、園という組織を深めていくことが大切と学びました。ミドルリーダーとして園をサポートしながら、子どものため、園のために何ができるのか考え、日々保育をしていきたいと思います。

また、今回の研修では、他園の先生方とのグループワークを行い、様々なアイデアや助言をいただき、３日間でたくさんの学びを得ることができました。

主任教員研修会

〈7月27日㈬、グランシップ〉

【講義１】和洋女子大学教授 矢藤誠慈郎先生「保育の質を高めるチームづくり」

保育目標に向かってより質の高い保育をしていくために、職員同士で同僚性（問いかけ合い・学び合い・高め合い・支え合う組織文化）を高めること、変化する組織にしていくこと、教育要領に沿って研修していく大切さを学びました。

【講義２】（一財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構副理事長 宮下友美恵先生「子どもの学びをつなぐ幼保小接続」

全ての子どもが格差なく質の高い学びへ接続できるように、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりに教師・家庭・地域が話し合いを深め、幼児教育と小学校教育の相互理解に努めていきたいと感じました。

乳幼児教育研修

〈8月1日㈪、グランシップ〉

【講義１】静岡県立大学短期大学部教授 小林佐知子先生「子どもの育ちの鍵は、乳幼児にある」

発達援助のポイントやミラーリングについて、またアタッチメントや安全基地などのお話がありました。講義を聞いて改めて乳児期の周りの大人の関わりが重要であることを再確認できました。

【講義２】子どもとことば研究会代表 今井和子先生「乳幼児のことばと心の育ち それにかかわる保育者のまなざし」

聞く力の弱体化や語彙力の低下、乳児の言葉のはじまりから言葉の獲得について、また幼児期の子どもの声や言葉に耳を傾けることの大切さについてのお話がありました。子どもとの対話を日々大事にし、子どもから発せられる言葉を大切にしていきたいと思いました。また乳児から幼児の連続性のある保育をしっかりと理解し取り入れていく必要性を改めて感じました。

特別支援教育研修

〈8月8日㈪、グランシップ〉

聖隷クリストファー大学教授 和久田佳代先生「発育発達過程に沿った子どもの運動遊び」

文京学院大学准教授 茂井万里絵先生「子どものあらわれを支える他機関との連携」

感覚が未発達な子、感覚過敏な子が増えている現状の背景に、０歳から１歳の育ち（腹ばい、寝返り、ハイハイなど）の中で、発育発達過程に沿った運動の不十分さが大きくかかわっているとのことでした。子どものどのような感覚が過敏で、鈍感なのかというところから、必要な運動を考えて取り入れていく必要があると感じました。また、子どものあらわれを伝えるときに、「感覚的になりがち」というお話があり、保護者や他機関の方にもわかりやすく意図を伝えるため、そして、その子をより知るためにも、子どもの姿を具体的に捉えて整理することが大切であると学びました。子ども一人ひとりの発達段階を捉え、かかわっていくことの大切さ、保育教諭の役割の重要性を改めて感じた研修でした。

教育研究講座（４～７年目）

〈8月9日㈫、リモート研修〉

【講義１】静岡大学名誉教授 渡邉保博先生「保育計画について～子どもが主体の計画づくり～」

計画を作成する上で、「PDCA サイクル」を生かして、子どもの姿や発達を豊かに見つめる眼差しを持ち、共有し保育する視点を豊かに持つことが大切であると学びました。今後の保育では、「PDCA サイクル」を意識しながら保育計画を進めていきたいと思います。

【講義２】名古屋学芸大学教授 津金美智子先生「場面における同僚性について」

幼児理解を深め、一人ひとりの個性や可能性などを把握し指導の改善に生かすこと、また指導の計画を立てる上で振り返りをすることが大切だと改めて感じました。職員間の連携を密にとり、多面的に幼児を捉えていくことで、その子どもの可能性を引き出していくことが大切であると学びました。

３年目教員研修会

〈8月9日㈫、グランシップ〉

【講義１】常葉大学教授 木山幹恵先生「園生活におけるリスクマネジメント」

学校保健、学校給食、学校安全を中心にお話され、園の安全管理については、①対物管理（点検）、②対人管理（観察掌握）、③事故等に備える等、それぞれの項目において体系的に説明されました。現場で起きる事故は小さなヒヤリハットやヒューマンエラー等のミスが重なって発生するため、傾向を分析すると共に、環境整備並びに人材育成が不可欠であるとご教示いただきました。

【講義２】静岡県立大学短期大学部助教 名倉一美先生「子どもの協同性を育むには」

子どもと一緒に保育者自身も遊びを作っていくことが大切であり、協同的な遊びの環境構成について事例を挙げて説明されました。遊びを深めるために子どもの興味、関心を理解しようとする姿勢は持ち続けたいと思いました。

教育研究講座（８年目以上）

〈8月10日㈬、リモート研修〉

【講義１】共立女子大学教授 田代幸代先生「実践の振り返りと評価 保育記録からはじまるカリキュラム」

保育記録は、様々な取り方がありその記録から子ども理解へとつなげていくことが重要である。記録から幼児理解→計画→環境の構成→実践→反省・評価→幼児理解…と発達や学びの連続性を確保していくことがとても大事である。また３歳、４歳、５歳の事例をもとに評価についても学び、質の高い幼児教育・保育を実現し、発達に応じた指導をカリキュラムへとつなげ、それが次年度、または小学校へその内容が適切に引き継がれていくことが望ましいということも学びました。

【講義２】㈱リール代表 孫ちょんす先生「今、園に必要なリーダーシップを考える」

これから少子化がどんどん進む中で園の統廃合などが予想される。だから今から準備していく必要がある。園を運営する上で、３つの視点がポイントになる。１つは職員の育成、２つめは保育の質の向上、３つめは保護者から信頼される園づくり。教員一人ひとりが主体的に取り組み、子どもたちの未来のために良いチームを築き、魅力ある園づくりをしていく必要がある。そのために園の理念や教育目標をしっかりと持ちゴールをイメージすることが大切であるという内容でした。今だけでなく今後を見据え各園がチームとなって取り組んでいくことが必要だと感じました。

初任者研修会（第５回）

〈8月10日㈬、グランシップ〉

【講義１】常葉大学教授 長橋秀樹先生「子どもの絵（画）の発達について」

領域「表現」の意義や子どもの知的欲求の場の獲得について、環境を通して行う教育及び保育の意義などの話があり、また子どもの描画活動についてお話いただきました。実際に描画活動を体験しながら学び、子どもの持ち方で描くととても描きにくく、自分が思っているように描けませんでした。発達段階に合わせた絵の表現について、もっと勉強していきたいと思いました。

【講義２】大阪大谷大学教授 長瀬美子先生「幼児期の発達とあそび－あそびの中で大切にしたいこと－」

幼児期の発達特性や子どもに楽しい遊び、豊かな経験を保障するために何が必要かなどについてお話いただきました。幼児期の遊びの大切さを改めて感じ、楽しい遊び、豊かな経験を保障するには、相談しながら楽しいことをつくるということを学びました。子どもが安全に生活できる環境、他児との関わりを作れる環境など、保育者にとって環境づくりはとても大切であり、計画的に環境づくりをしていきたいと思います。

特集

乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達

ー現代的集団共同型子育ての中核としての園の役割ー

その6

東京大学大学院教育学研究科教授
同附属発達保育実践政策学センター長

遠藤 利彦

1962年山形県生まれ　東京大学教育学部卒業
東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学　博士（心理学）
東京大学教育学部助手、聖心女子大学文学部専任講師、
九州大学大学院人間環境学研究院助教授、京都大学大学院教育学研究科准教授、
東京大学大学院教育学研究科准教授を経て、現職
専門領域は発達心理学・感情心理学・進化心理学など
日本赤ちゃん学会理事・日本子ども学会理事・日本学術会議第25期会員など

⑴ ヒトの子どもはとにかく手がかかる、長きに亘って手がかかる

生き物としてのヒトの子どもは、近縁種であるチンパンジーやゴリラなどの霊長類も含め、哺乳動物の中では、相対的に未熟な状態で生まれてくることが知られています。ヒトの乳児は、身体移動能力にしても、栄養摂取能力にしても、体温維持能力にしても、際立って、その自律性が低く、親を始めとする周囲の大人からしっかりとしたケアが施されなければ、ほんの数時間という単位で、重篤な生命の危険にもさらされかねないきわめて脆くて弱い存在だと言えるのです。当たり前のことですが、ヒトの乳児は、少なくとも生後半年間くらいまでは身体移動能力が圧倒的に乏しいがゆえに、どんなに誰かにくっつきたくとも、自分からくっつくことはできません。くっついてもらう必要があります。口に乳首をくわえさせてもらえなければ、いかなる意味でも栄養を摂ることができません。さらに、乳児段階ではまだ身体を震わせて体温を維持するという仕組みが未発達ですので、裸ん坊のまま、屋外に放っておかれたりしたら、夏の暑い日でもない限り、あっと言う間に、体温が低下して、数時間後には仮死状態に至ってしまうようなこともあると言われています。誰からから毛布でくるまれたり、抱っこされたりしなければならないのです。

また、この養育負担の大きさにさらに輪をかけているのが、ヒトの乳児の重さです。ヒトの乳児は、未熟でありながら、逆説的にも、飢えに対する対策として分厚い皮下脂肪を身に纏っている分、その体重は、非常に重いのです。例えば、大人になったゴリラは、オスはもちろんのこと、メスも少なくとも体重だけに着目して言えば、ヒトの大人の身体よりもはるかにたくましいということができるかと思います。それでありながら、平均出生体重で比較すると、ゴリラの新生児は、ヒトの新生児の約三分の二以下の重さで生まれてくることが知られています。このことは、ゴリラでは、たくましい親が、小さく軽い子どもを育てればいいのに対し、ヒトでは、か弱い親が、重くてしかも圧倒的に未熟な子どもを育てなくてはならないということを意味しています。

ちなみに、ヒトの子どもが、手がかかるのは、乳幼児期（授乳されて成長する期間）だけではないようです。生物学の研究では、ヒトの卒乳後の子ども期（栄養摂取や安全確保なども含め生存や成長が親への依存を前提として成り立つ、一般的に思春期までの期間）は、多くの生物種の中でも際立って長いことが示されています。例えば、近縁種であるチンパンジーとの比較で言えば、乳幼児期こそ、チンパンジーが4、5年に対して、ヒトが約3年と短いのですが、その後の子ども期に関して言えば、チンパンジーが2、3年に対して、ヒトは10年前後ときわめて長いのです。つまり、ヒトの子どもにかかる養育の負担は、発達早期のみならず、その後も、子ども自身が繁殖可能になる、少なくとも思春期以降に至るまで、非常に長きに亘って重いものであり続けるのです。

⑵ ヒトは集団で協力しながら子育てしてきた

ここまで述べてきたような事情から、ヒトにおいては、例えばチンパンジーのように、母親であるメスだけが、単独で自活しながら、子育てをすることが実質的に不可能になったと考える研究者が多いようです。一説には、ヒトの進化のプロセスの中で、まず子どもの父親が母子の扶助および時に養育そのものに参加する必要性が生じ、そこに、一夫一妻の緊密な関係性およびその間における子どもという、現代の私たちにとってはごく当たり前の家族形態が生まれてきたようです。また、ヒトの子どもの長きに亘る養育負担の大きさは、ヘルパーとして、父親を引き入れるだけでは不十分で、特に子どもにとってのおばあちゃんや年長のきょうだいが、ヒトの進化において、きわめて重要な役割を担うに至ったようです。

こうした父親や祖母などの養育への参加は、当然のことながら、元来、長きに亘って養育負担の大きいヒトの子どもの生存や成長を助けることになります。しかし、近年のより一般的な見方は、ヒト本来の養育ネットワークは、こうした血縁者に限定されたものではなく、近隣に住んでいる非血縁者をも広く巻き込んだものだったのではないかというものです。例えば、サラ・ハーディという女性の人類学者は、ヒトが「共同繁殖」の性質を進化のプロセスの中で徐々に強め、独自の集団共同型子育ての体制を築いてきたと主張しています。彼女に言わせれば、生物種としてのヒト本来の生活世界は、血縁、非血縁にかかわらず、様々な近しい他者によるアロマザリング（母親以外の者による養育）がごく当たり前のように存在し、子どももまた、母親以外の多くの他者からのケアを柔軟に受け容れる中で、より確実に生存し成長してきた可能性が高いのだと言います。

⑶ 子育ては園を中核とする社会的ネットワークの中で

上述したような近年の一連の議論は、母親を子育ての主たる担い手と見なし、母子関係をヒトの子育ての中心に据えて見る従来の考え方に疑問を投げかけるものと言えます。実際、現代においても、狩猟や採集を主たる生業とするアフリカあるいは南米などのいくつかの部族では、出生後間もない最早期段階からのアロマザリングが広く認められるということが確かめられています。また、そうした文化では、一般的にヒトの乳児の標準的な特徴とされる人見知りの度合いが弱く、子どもが早くから親だけではない様々な他者との間に親和的な関係を築き得るよう、すなわちアロマザリングを容易に受け容れ得るようしつけがなされている可能性が高いのだそうです。

生物種としてのヒトにおける養育は、元来、専ら母子という単一の関係の中で担われてきた訳ではなく、母親以外の様々な他者が子どもに濃密に関わるネットワークの中にあって成り立ってきた可能性が高いと言えます。また、現代でも、文化によらず、子どもは、大なり小なり、そのネットワークに支えられて成育しているのだという見方を採る研究者が増えてきています。もっとも、少子化とともに核家族化が進行する現代日本において、現実的な意味で、そのネットワークに参入し、その中で最も大きな役割を果たし得る他者の第一候補は、家庭と並び、子どもにとってもう一つの社会的世界である園という場での大人、すなわち保育や幼児教育に携わる先生ということになるのでしょう。

実のところ、かつて、アタッチメント研究の枠内では、乳児段階から子どもが家庭外の保育を経験すると、それが母子関係に悪影響を及ぼし、そこにおけるアタッチメントを不安定にするという見方が支配的だったと言えます。保育施設に子どもを長時間預けることが、まず本来、土台として形成されなくてはならない母子関係のアタッチメントにマイナスに作用し、そしてその不安定なアタッチメントに起因して、今度は、子どもが児童期以降、様々な心理社会的問題（攻撃性の高さや協調性の低さなど）を多く示すようになるのだなどということがまことしやかに主張されていたのです。しかし、その後、米国の国立研究機関などによる大規模調査が行われるに至り、今では、こうしたことはかなりのところ、否定されるに至っています。そして、むしろ、質の高い保育や幼児教育を早くから受け、子どもが保育者との間に安定したアタッチメントを形成することが、子どもの心身の健やかな成長に、家庭内の養育にはない、独自の貢献をするということが明らかにされてきています。

もっとも、ヒト本来の子育てが集団共同型子育てであり、それがいくらヒトの本性に適ったものであるにしても、大きく社会の中の人間関係や集団の構造が変わってしまった現代において、日本において、かつてのそれをそのまま復活させるということは実質的に不可能だと言わざるを得ません。おそらくは、保育や幼児教育の場を中核にして、保育者が中心となって、子どもの健やかな成長や発達のためのセーフティ・ネットをより強固に多層的に充実させていくこと、それが最も現実味のある現代的な集団共同型子育ての形と言えるのではないでしょうか。

特集

1

可能性を引き出すリーダーシップ
～プレイヤーからリーダーへ～

松原 美里

（合同会社ウメハナチャイルドケアコミュニケーションズ、保育コミュニケーション協会 代表）

北海道網走市出身
保育士。横浜女子短期大学卒業後、横浜市の保育園、川崎市の児童養護施設に勤務。認定こども園保育園部施設長を経て、現在は静岡を拠点に全国で活動。
コーチング･心理学･NLP･システム思考等を学び、資格を取得。保護者向けの子育て支援講座、新人･中堅の保育士向けのコミュニケーション研修、管理者向けのマネジメント研修を提供し、「参加者が主役」「笑顔あふれるワーク」が好評を博す。「子どものために大人が輝く背中を見せる」をモットーに、オンラインサロン、園内ファシリテーター・認定講師の育成も行っている。

ようやく子どもたちとじっくり関わることができるようになった頃、突然リーダーというお役目をいただくようになった。せっかく保育が楽しくなってきた時期、担任としてもっと子どもとじっくりかかわりたかったのに…。
子どもよりも大人とかかわることの方が多くなり、かえってストレスを感じる…。

そんな風に感じたことはありませんか？そもそも、リーダーになんてなりたかったわけじゃない。子どもが好きで保育の仕事に就いたのに、どうして…!? そんな葛藤を抱えているリーダーは少なくありません。

なぜかというと、「子どものために」という使命感で努力を重ねられてきたからこそ、先輩や上司がその可能性に気がつき、さらに現場に貢献できるリーダーという立ち位置に抜擢されたのです。

現場の一担任・保育者では、疑問や提案をくみ上げてもらう機会がなかなかないかもしれません。その中でも、もやもやする思いやより良い現場のための提案があなたの中には生まれているのではないでしょうか。

あなたの頑張りによって、その声を上の立場の方に提案する大切な機会（チャンス）をいただいたのです。

とはいえ、意外と「リーダーになったけれども、何を求められているのか？」「どんな動きを期待されているのかがよく分かっていない」というリーダーも少なくありません。それもそのはず、具体的に「リーダーとはこういうことをする人ですよ」というお話をしていただく機会は少ないものです。

リーダーとは、目標を示す旗を立て、周囲を導く人のこと。クラスに置き換えて考えてみると、クラスリーダーは他の担任の先生たちと一緒にチームを作る中で「子どもたちのために、どんな園・生活・行事・姿勢でありたいか？」についての旗を立て、そこに向けて他の職員が楽しみながら前を向いていけるよう、リーダーとして周囲を導くのがお役目です。

具体的には、目標へ向けて主体的に行動するチームを創ること。チームメンバーが活躍できる場や仕組みを作ること。そこにいる一人一人への気配り心配りを日々行い、人間関係への配慮を行うことが、それにあたります。

リーダーは常に自分の目の前の仕事だけ見るのではなく、一歩引いて全体を見る力が必要になります。また、メンバーそれぞれにも人生のタイミングがありますので、今がそのタイミングなのかを潮目を見るように見極める目が必要です。

これまでプレイヤーとして現場の最前線で頑張ってきた人にとっては自分が動くのではなく人にチャンスを渡すこと・根回しや心配りをすることはもどかしいことでもあります。気が付けば、プレイヤー時代の癖で自分が動いてしまうこともあるのではないでしょうか。そして、あとで莫大な業務量に押しつぶされそうになり心に余裕がなくなっていくことも。

また、リーダーとして他の人に役割を振りたいという思いはあっても、「これから教えるのか…」「どう伝えたら良いんだろう…？」とそのプロセスを考えると面倒な気持ちが頭を過ぎり、「自分でやった方が早い」と背負い込んでしまうこともあるかもしれません。「私が頑張ればいい」と自分に言い聞かせ、少し無理をしてでもやり遂げる業務が増え、余裕の無さからちょっとしたことにもピリピリしてしまうことも。そんな時じつは周りのメンバーからは「怒っている」「私､何かしたかな…」と思われていたり、気を遣わせてしまっていることもあります。

ですがこれは、要注意です。

リーダーは、“スーパープレイヤー”になってはいけません。

これまでは「うちの子」というのはクラスの子どもたちのことでした。

リーダーにとっての｢うちの子｣は､メンバーである職員。

ともに喜び合えるチームへ向けて、一体感ややりがいが感じられ、モチベーションが高まるコミュニケーションを図っていきましょう。

メンバーの成長を願いつつも、突然業務を振ると「面倒なことを押し付けられた」「不親切な人」「自分勝手」という誤解を受けかねません。ご自身が「こうしようよ！」と旗を立てるリーダーシップを体現して背中を見せ、ポイントを一緒に共有し、全体の士気が高まってきたらそっとメインステージを見守る立場：プロデューサーの目線で全体を捉えましょう。

一連の流れの中で、表面的には体を動かすことができ、手が空いてくることでしょう。ここで何かをしていないと、自分だけ楽をしているような罪悪感にとらわれる・奪われる・居場所・存在意義が分からなくなることもないでしょうか、「自分自身もスポットライトを浴びる舞台に立ちたい !!」といった気持ちなのではないでしょうか。しかし、これが落とし穴なのです。私自身も何度も陥りましたが､罪悪感から最前線のプレイヤー業務に戻ることで､リーダーとしてのコミュニケーションや采配が滞り、チーム全体に不満が渦巻くことになります。

リーダーの仕事は体を動かすことではなく、頭脳労働です。様々なポイントについて一人一人のメンバーに業務を任せるためには、それぞれの可能性を見抜き、次なる一歩へ向けたお役目を託すコミュニケーションの手間暇が掛かります。自己重要感に振り回されず支える側に立ち、コツコツコミュニケーションを積み重ねて行きましょう。メンバーの活躍への感謝と賛辞を伝える中で、「またやってみよう！」という気持ちを後押しする。そんなリーダーシップを発揮していっていきましょう。

ここまでのリーダーシップを日常業務に落とし込むには､具体的に何を意識･行動していけばよいのでしょうか？

忙しさゆえ心にゆとりがなくなり、視野が狭くなる毎日だからこそ、ことあるごとにビジョン：目指す理想の状態を言葉で分かち合いましょう。「こうなったらいいね。そうしたら、こんな素晴らしいことが待っている。私たちでそこへ向けて一緒に取り組んで行こう。頼りにしているよ！」と。それによって､「そうか私たちは、そこへ向かっているんだった！」と目線が上がり、目先の損得に一喜一憂するのではなく大切なことに意識を向けることができるようになります。みんなを導く旗を立てるためにも､自園･幼児教育の分野にとどまらず、広い視野で今起きていることや関連・背景に思いを馳せることができるよう視野を広く持つことです。そして、気になることがある場合はそのままにせず、先を見越して根回しをするなど、手を打ちましょう。託しはしても、何でもいいわけではありません。最悪の事態は回避できるよう、さまざまな事態を想定しておきます。あなたに見えている景色をほかのメンバーと分かち合うためには、経験や体験のギャップを埋めていく必要があります。ご自身の体験や気づきに言葉を与え、周囲のメンバーと思いの分かち合いを行った上で、日々揺れ動く現場のフォロー（相談・課題発見・課題提案・つなぎ役・通訳）を行いましょう。

今までとはちがう立ち位置・行動を受け入れていくのには、初めはザワザワする気持ちもあることでしょう。しかし、次第に慣れると腹が決まってきます。

あなたならではの素敵なリーダーシップは、周りのメンバーの希望になります。素敵な背中を、心より応援しております。

幼稚園教諭になって

焼津豊田幼稚園　藤下 夢乃

今年の４月私は、小学生の頃から夢だった幼稚園教諭になりました。年少児クラスの担任をやらせていただくことになり、夢を叶えた喜びと、緊張や不安を抱えて迎えた入園式は今後も忘れることはないと思います。

４月からの毎日は、目の前のことに必死であっという間に過ぎていきました。保育の進め方や子どもの対応、保護者対応など、わからないことばかりで、多くのことで悩み不安になりました。その都度、先輩の先生方に助けていただき、多くのことを学ばせていただきました。さらに、子どもたちの無邪気な笑顔に助けられたこともたくさんありました。

あっという間に過ぎていく毎日でも、多くの学びや発見がありました。その日に感じたことや学んだこと、子どもたちの成長や変化を日誌に書き込み、次の保育に繋げられるように意識し、自分なりに学びを深めてきました。さらに、先生方に教えていただいたことや学んだことは、すぐに実践するようにしました。実践したことは、子どもたちの反応となって返ってきます。実践・反省・学びを繰り返し、子どもたちと共に成長していけることに、幼稚園教諭としてのやりがいを感じました。

これまでに得た学びを生かし、子どもたちとたくさん関わる中で互いに成長していければと思います。そして，自分自身の保育も少しずつ余裕を持って取り組んでいけるよう努力をしていきたいと思っています。

多くのことを学ばせてくださる先生方や可愛い子どもたちに出会い、日々成長していく子どもたちの姿を間近で見守れることに感謝をしながら、一日一日を大切に過ごしていきたいと思います。

子どもたちに「幼稚園って楽しい。」「明日も来たい。」と思ってもらえるような、笑顔溢れる保育を目指して…。

保育教諭２年目になって

しらゆりこども園　恩田 侑子

私は幼稚園時代の担任の先生に憧れ、保育士に興味をもち、保育教諭２年目になりました。「侑子先生」と声をかけられる度、先生になったんだと嬉しく実感するとともに責任感も感じます。１年目は３歳児の副担任になり、主活動を進める難しさを　感じました。環境の整え方や、子どもを惹きつけて活動に入るための伝え方を事前に考えていても、上手くいかないことが多かったです。そんな時、先輩が導入や話し方などのアドバイスをしてくださり活動の中で学ぶことができ、もっと子どもがわくわくするような保育がしたいと思うようになりました。子どもが、「楽しい」と嬉しそうに話す姿を見ると、私も楽しくやりがいを感じました。

２年目になり１歳児の担任になりました。１歳児の成長には日々驚かされて、保育の難しさも感じます。初めは１歳児ということで身の回りのことをやってあげることが多かったです。しかし、その子に合わせて成長させるということの意識やメリハリを持って伝えていくことを先輩からアドバイスしていただき、子どもへの声掛けや援助の方法など試行錯誤しています。そして、子どもが身の回りのことを一つずつ出来るようになった時、一人ひとりの違った成長が見られると嬉しさを感じます。まだ分からないことも多いですが、嬉しさをバネに個々の成長に向き合いたいと思います。

私は、しらゆりこども園の環境で保育をしたいと思い、地元を離れました。初めは知らない土地で期待と不安がありました。しかし、「侑子先生」と笑顔で話しかけてくれる子どもたちや、いろいろなことを丁寧に教え、フォローしてくださる先生方がいるおかげで頑張ることができます。知らない土地だったこの場所が好きな場所に変わり、自分を成長させてくれていると思います。自然豊かで日々の季節を感じて保育ができるしらゆりこども園で子どもたちと一緒にもっと成長していきたいと思います。

保育の窓
コミュニティ

子どもたちと過ごす日々の中で大切にしたいこと

沼津聖マリア幼稚園　青木 初音

今勤めている園は、実習でお世話になった園であり、私の母園でもあります。

私は、自分が幼稚園生だった頃に年少・中・長の３年間同じ担任の先生でした。今でもその先生との楽しかった思い出や大好きだった気持ちが鮮明に残っています。自分もこの先、複数回同じ学年の担任を持つことがあるでしょう。その時に「また先生で良かった」と子どもたちに、もちろん保護者の方々にも言われるような、誰にとっても心地の良い存在でありたい。そのような保育者になりたいと思っています。

現在私は５年目になり、今までに満３歳児クラスを２回、年少を１回、年中を２回、そして今年度は年中組を受け持っています。大変なことはあるけれど、日々子どもたちの笑顔に接し、成長を感じ、その様々な姿に刺激を受け、こんなに素敵な仕事は他にはないと、やりがいを感じる毎日です。

９月になったタイミングで私が受け持つ年中組に２人の新しいお友だちが仲間入りしました。新しい環境に加えて、運動会の練習も始まり忙しい日々。なかなか落ち着かなく、幼稚園に馴染むのも時間がかかるかな？と少し心配をしていましたが、私が何かを言ったわけではないのに、子どもたちが率先して、２人の手助けを始めてくれたのです。数人ではなくクラスのみんなが気にかけて、毎日の仕度の仕方を教えてくれたり、体操の時に並ぶ場所へ手を引いて連れていってくれたり、たくさんの優しさを２人に向けてくれました。今では２人も毎日幼稚園を楽しみに登園してきてくれいる様子が見られます。子どもたちに「ありがとう､みんな優しいね」と伝えると「だって､やってもらったから」と言うのです。お家の方や保育者、幼稚園の友達と関わる中で得た経験を今度は自分たちで実践し、成長する姿を目の当たりにし、自分が子どもたちと過ごすうえで積み重なっていく些細なことの全てが、子どもたちのこれからに繋がっていくのだと思い、その責任の重さをあらためて自覚しました。保育者と言う仕事に誇りを持ち、これからも、子どもたちから学びながら過ごしていきたいと思います。

信頼できる仲間たちと共に

静岡サレジオ幼稚園　青木 織江

私は多くの先生方のように憧れを持ってこの職業についたわけではありません。高校卒業時に夢や目標のなかった私は家から通える大学に行き、母園で実習をしました。実習は大変でしたが、笑顔で「先生」と慕ってくれた子どもたちと、子どもを導く先生方の姿又その先生方から丁寧にご指導頂いた４週間は今まで味わったことのない充実感とやりがいを感じた時間でした。そして新人当初、血気盛んで周りも見えず、夢中で保育をしていた私の姿を受け入れ認めてくださった先輩方の存在は私の人生を変えることとなりました。

私の勤める幼稚園は、文化、自然が調和した街に位置しています。全職員が園児全員の名前はもちろん育ちを共有し、心に寄り添い細やかに関わると共に、保育者が一人で悩みや迷いを背負うことがなく保育者同士が話し合うことで問題を解決しています。子どもの成長の喜びを分かち合うことで得る安心感や仲間との一体感は、私にとって大きな力になっています。

経験年数を重ねるにつれ、より良い保育のベースには保育者同士が年齢に関係なく個々のスキルを認め合える関係でいることの大切さを実感しています。

１年目から 30 年目の保育者がいる中で経験の違いを難しさと捉えるのではなく、それぞれの良さや得意なところを認め合い、足りないところを補い合っています。ベテランが若い先生に上から指導するのではなく、一緒の目線にたって保育を考えたり、逆にベテランは若い先生の新しい考え方を受け入れたり、刺激をもらったりすることでそれぞれの保育が生き生きとしています。子どもに対しても同じです。耳を傾け、受け入れて時にはこちらがふと気付かされ教えてもらうこともあるのです。

時々、新しい気づきや面白い出来事に子どもより夢中になっている先生達の姿があります。自然と子どもたちにワクワクが伝わり笑ったり発見に驚いたり子どもと一緒に心を揺さぶられています。この仕事の醍醐味であり、幸せだなと感じる瞬間です。

今まで私が保育者として、人として育ててもらったように、微力ではありますが、これからを担う先生方に子どもの成長に関わることのできる尊い仕事の魅力を伝えながら一緒に成長していきたいと思います。

もの想い

親も日々成長

藤枝東幼稚園保護者会
久保野 明生華

我が家には小学５年生の長女、３年生の長男、年中の次女がいます。楽しく騒がしい毎日を過ごしています。３人とも藤枝東幼稚園にお世話になっており、パパも藤枝東幼稚園の卒園生です。

我が家には子育てで大切にしていることが２つあります。

１つは「少し教えてあと放置」です（笑）。失敗も成功もとにかく経験が大切だと考えています。分からなくて助けを求めてくれば一緒に考え少しだけヒントを与え、自分で考える力を高めてほしいと思っています。皆さんも経験があるかと思いますが、こどもの発想力には本当に驚かされますよね。例えそれが見当違いでうまくいかなかったとしても、すぐに否定するのではなく、何でうまくいかなかったのか、何が悪かったのかを考えてほしいからです。大人は様々な経験からどうしても、早く効率的にと考えてしまいますがそこは我慢。子どもの考える力を信じます。しかし、放置と言っても、その言動や行動が他人を傷つけたり、危険がある場合にはすぐに止めに入ります。そこは「教える」ことも必要だと思います。

２つ目はなるべく自然に触れる機会を増やすことです。コロナ禍でなかなか外に出て友達と遊ぶことができず家でスマホ、テレビ、ゲーム…仕方がないことなのかも知れませんが、自然に触れることで感受性が豊かになり心に余裕が持てると思っています。気持ちに余裕が持てれば相手の気持ちを理解し、考えて行動できるようになり、友達とのコミュニケーションもスムーズになります。また、自然の中から危険なことも学ぶ機会になり、たくましく成長してくれると考えています。

コロナ禍ではありますが、できることを子どもたちと一緒に考え、学べる環境作りをしていき、親も日々余裕をもって子どもたちと共に成長していきたいです。

受け継がれるあけぼのっ子

あけぼの幼稚園 あけぼの会会長
藤下 麻未

我が家には４歳の娘と１歳の息子がおります。あけぼの幼稚園とは不思議と縁がある我が家で、私の母も夫もあけぼの卒園生です。娘も約１年前に晴れて「あけぼのっ子」となり、現在は年少クラスで元気いっぱい過ごしております。

あけぼの幼稚園の園舎には廊下と保育室を仕切る壁やドアがなく、とても開放的で明るい造りになっています。また、学年やクラスの垣根を越えてたくさんのお友達と園庭で目一杯外遊びをする時間を多く設けてくださっています。そんな伸び伸びとした環境のもと娘にとって生まれて初めての集団生活を過ごしておりますが、日々逞しく、そして優しく成長している姿を見てとても嬉しく感じております。

10 月の運動会。娘は初めての参加でしたが、当日は日頃の練習の成果を発揮し徒競走やダンスなど元気いっぱい頑張りました（張り切りすぎてその後体調を崩してしまいましたが…）。運動会での子ども達の姿を見て、こういった経験をたくさん積むことによって子ども達は更に豊かに成長していくのだと実感いたしました。園では運動会の他にも年間を通して多くの行事を用意してくださっておりますが、コロナ禍で子ども達のために最大限のことをしようと常にご尽力くださる先生方には心から感謝しております。

年少の保護者が PTA 会長を拝命することはおそらく珍しいことかと思います。右も左も分からず最初は不安でしたが、周りの皆様に助けていただきながら日々の活動を行えております。PTA の活動を通じて、子ども達や先生方と関わる機会が増えたことはとても貴重な経験だと感じます。園に通う子ども達の元気溢れるキラキラした姿を見ていると、こちらも自然とパワーをもらえるような気がします。

娘には幼稚園での日々の生活や季節ごとの行事を通じて健やかな体と心を育んでほしいと願いますし、家庭の中においても笑顔を大切に過ごしながら娘と共に私自身も成長していきたいなと思います。

乳幼児期の体力づくりの考え方

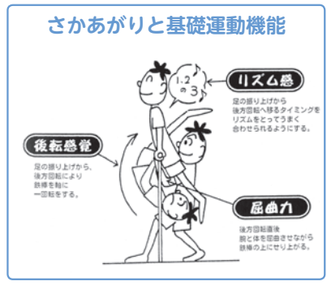
～『さかあがりにつながるあそび』で基礎体力づくり～

乳幼児期の体力づくりの考え方

運動の基礎をどの子にも遊びの中で育ててあげることが大切。

コロナ禍において子ども達の心と体力の育成が十分になされない園や家庭も多いのではないでしょうか、そこで保育者と保護者による子どもの体力づくりについてご提案させて頂きたいと思います。まずは、乳幼児期の体力づくりの考え方についてですが、どのスポーツもいくつかの基礎運動機能（下記参照）が必要であり、それらを巧みに組み合わせること（練習）で上達していきます。運動をお絵描きに例えてみますと、まずは 12 色の絵具を準備しておくと楽しく書き始められるように、スポーツをはじめ様々な運動は、幅広い運動機能を身に付けておくとスムーズに慣れ親しむことが出来ます。具体的に逆上がりを例にあげてみますと、後転感覚と体重を支える力（全身の屈曲力）、足で地面を蹴って回転に結びつけるタイミング（リズム感）などが必要となり、それらを上手く組み合わせること（右図）で出来るようになります。乳幼児期は運動における 12 色の絵具ともいえる、基礎を育てておくことが大切です。「やればできる。」その基礎力が自ら体を動かして遊ぶ楽しさに繋がっていくことでしょう。

さかあがりと基礎運動機能



年齢別基礎体力づくりあそび

できるできないにこだわらず、楽しく継続することが大切。

今回は、基礎を育てる遊びをより興味を持って行えるように『さかあがりにつながる運動あそび』として年齢別にご紹介いたします。ここでは主に屈曲力、後転感覚、リズム感が育ちます。各運動の目標は１年かけて少しずつ近づけるように少し高めに設定してありますので１～２つ前段階から行うことをお勧めします。できたかできなかったにこだわらず、楽しく継続して行うことが大切です。体力づくりのみならず、ふれあいを通して豊かな心の育成にもつながります。

運動における大切な機能と運動例

- 全身の屈曲力…（例）腕と膝を曲げて鉄棒 にぶら下がる
- 全身の伸展力…（例）高くジャンプ
- 前転感覚……（例）でんぐり返し
- 後転感覚……（例）足抜き回り
- リズム感……（例）リズムに合わせたダンス
- 重心移動……（例）うさぎ跳び
- バランス感覚…（例）一本橋渡り
- 力の伝達……（例）ボール投げ、蹴り
- 安定した足腰…（例）ジグザグ走り
- 柔軟性……（例）開脚前屈等

（０歳児）抱っこでオットット

（１歳児）高い高いとユラユラ抱っこ

（２歳児）ぴょんぴょんジャンプとグルリンコ

（３歳児）駆け上りグルリンコとガンバリぶらさがり

（４歳児）グルリンコとガンバリぶら下がり

（５歳児）腕逆上がり

親子ふれあいあそびとしてお勧めします

今回ご紹介いたしましたふれあい遊びは、園で行うのは勿論のこと、是非、ご家庭にもご紹介して頂く事をお勧めします。次回はサーキットあそびで基礎体力を育む方法をご紹介いたします。とび箱の開脚跳びにつながるあそびも予定しておりますが、跳べることよりも今回と同様に継続する事が大切ですのでできた、出来ないにこだわらずに楽しみながら行ってみてください。

磯谷 仁（通称スッパマン先生）
【有限会社そのいい羊達 代表取締役】
幼稚園教諭を経て有限会社そのいい羊達（幼児体育指導）設立
元浜松大学准教授、元常葉大学准教授
各社保育誌に執筆連載
全国各地の研修会にて体育実践指導をおこなっています

静私だより
NO.196
2022.12.15

ナイスショット

仲良し三人組

こんなの見つけたよ!

トーマス号乗車

大きなお芋がとれたよっ!

おみこし"わっしょいわっしょい"

自家製味噌でつくった焼きおにぎり!

地震の避難訓練

シーソー面白い

このどんぐりは…これかな〜

でーきた♪ぱっちんほうき!

編集後記

台風15号による清水区での浸水や断水の被害は、改めて自然の恐ろしさを痛感するとともに、水の大切さを感じました。また牧之原市で起きた園バス事件は幼児教育に携わる者として、とても胸が締め付けられる思いです。亡くなった3才の女の子のご冥福を心よりお祈り申し上げます。昨今、子どもに関する事故・事件が多く発生していますが、安心して園生活を送れるよう、子どもの健やかな成長のために頑張っていきたいと思います。

さくら台幼稚園　大嶽 素宏

発行人／千葉　一道
編集人／足立　武裕
広報委員会

発行所／(一社)静岡県私立幼稚園振興協会
〒420-0853
静岡市葵区追手町9番26号
静岡県私学会館内
TEL.054(254)6820・FAX.(255)3694

http://www.shizushiyou.or.jp/
E mail: office@shizushiyou.or.jp

印刷・レイアウト／(株)三創

このQRコードを携帯電話の「QRコードリーダー」で読み込めば、協会HPの携帯サイトにそのままアクセスできます。